

婦人百話

樂 天 子

一、歐米婦人理想の夫
 一英字新聞の記載によれば、歐米各國に於ける婦人の男子に對する好みは、國に依りて各異れり、即ち英國の婦人は風采堂々として威嚴ある男子を求め、佛國婦人は額の美麗にして愛嬌ある男子を求め、獨逸の婦人は律義眞實なる男子を求め、西班牙婦人は氣慨なき男子を嫌ひ、伊太利婦人は詩的男子を好み、露國婦人は歐州諸國にて野蠻人といはるゝ好き男子を好み、米國婦人は資産多き男子ならばその位置の高下を論ぜず好んで之と縁組せんことを願ふといふ。英國の實用的なる、佛國の虚飾的なる、露國の野蠻的なる、米國の拜金主義なる、皆よくその國の神髓を現はしたるものといふべきなり。

二、支那婦人の纏足
 纏足は支那婦人中、漢人種の間に行はるゝものに

して、彼等に於ける一種の人造美人法なり、その由来は五代に於ける南唐李後主を以て源とせるもの信すべきに似たりといふ。即ち後主の宮媚窈窕なるもの、善く舞ふを以て名あり、後主即ち帛を以てその足を纏ひて纖小ならしめ、屈げて新月の状をなさしむ、これより窈窕に倣ふもの漸く多く遂に上下これを美として、老若貴賤皆これに比するものを云ふ。
 纏足の惡習は貴人に於て最も行はれ、足彌々纖小なれば彌々以て美人となして、その疇足の大切なること、歐米婦人の乳房に於けるが如し、故に通常にありてはこれを我が夫婿に示すの外、決して他人の目に入れしめず、他人若し強ひて迫りて無理にこれを見んとせば、婦人は羞を含みて情あるか、辱を怒りて嘗るかの二途に出づるの外なしといふ。
 既に足を秘して人に示さざるが故に、其着くる所の繡鞋必ず自家の手を以て之を製せざるべからず。因て婦人は貴賤の別なく、製鞋の事を解して、他人をしてその長短を知らしめず、而して纏足の形

狀は地方によりてその流行を異にし、天津には天津様あり、漢口には漢口様あり、千差萬別にして一定せず、要するに寛にして短なるもの、窄にして長なるもの、二種に大別することを得べしといふ、例令國の習慣とはいへ、西洋婦人の腰部緊張と共に、天然の美に背くの裝飾なれば、苟くも開明國の裝飾的美人法としては洵に好ましからざることなり。

三猶の風俗

▲猶の婦人は大肥を好む 昔し楚王は細腰を好みて、宮中には餓死多しと傳へられしが、夫れとは全く反對に、此地方の猶太婦人は、皆太りてコロコロするばかりなり、其路を行くは、宛も大白の轉がるが如し、蓋し此地方の猶人の間には、婦人は太とる程夫れだけ美なりとする習慣あり、去れば婦人は皆橄欖油を飲み、肥滿する食物を取る、これ荒夫間には、皆無なる習慣なり、

▲カフェ、ダンス 余は一フランを投じ、土人の珈琲店に入り、猶婦人のダンスを見たるが其衣服には袖なく、歐洲婦人の著しきものと相同じ、而して寛濶なれども歐洲男子の用ふるものと同様なるヅポンを穿つ我國のモンペと相似たり、故に荒夫

及び猶の婦人の服は、上部歐洲婦人的にして、下部は歐洲男兒的なり、前より見るときは、左程見苦からざるも、後より見るときは、嘔吐を催さんとす（外出のときは白布を纏ふを以て之を見るべからず）舞踏するに方て、無暗に腹を動かすは、其特色なるべしと雖も、其調子は何處までも歐洲的なり、然れども男子と手を取りて舞はず、且つ舞ひながら歌う處は日本的なり、三人の離し方、一人はバイオリン（元と印度より東西に傳はれり）を奏し、二人は鼓の如く皮にて作りたるものを打つ、是れ亦半東洋、半西洋的なり、歐洲人が北阿、阿刺比亞の世界を指して東洋的といひ、余には半東洋的、半西洋的なるは、次回の通信に明記すべし

▲猶の結婚 猶の結婚式は、中央の一陵高き處に、花嫁腰を掛を玉ふ、去れどもヅポンを穿つを以て、遠くより見れば、男子の如し、花嫁の左に立つは、花嫁附處女にして、其右に立つは花婿なり、ラバイ（猶太教の先生）其前に立ち、親戚、故舊之を圍み、以て式を擧ぐ、歐洲的といへば、歐洲人は首肯せざるべきも其主義は全く基督教と異ならず、荒夫の結婚に至りては、余未だ詳にせず、猶は一夫一婦なれども、荒夫は金さへあれば、幾人にも金屋に阿嬌を野ふ